

# 夢馳せる芙美子 直方に舞い降りる



林芙美子（1903～51）  
は戦前戦後に活躍した作家で、  
大正4年の夏から翌年5月頃  
までを直方で暮らしたとされ  
ています。

自伝的小説『放浪記』の冒  
頭では直方の木賃宿に宿泊し  
て行商した12歳の少女時代が  
描かれ、そこには大正時代初  
期に炭坑の町として発展する  
直方の街の様子も写し出され  
ています。

当時の一家の暮らしは貧し  
く、芙美子は扇子やアンパン  
の行商に明け暮れていました。  
直方での暮らしは決して明る  
く描かれてはいませんが、出  
会った人たちとの交流や母と  
肩を寄せて過ごした日々が生  
き生きと描かれ、「このころの  
思ひ出は一生忘れることは出  
来ないのだ」と直方での生活  
を締めくくっています。

その言葉通り、その後の芙  
美子の作家人生の道筋を作っ  
たのは、多感な時期を過ごし  
た直方時代だったのではない  
かと言われています。



1981年(昭和56年)に建立された文学碑



かごのなかにはアンパンがひとつ

芙美子像の制作にあたったのは、大関魁皇像を手掛けた、彫刻家片山博詞さん。直方時代の芙美子を、当時の12歳女子の平均身長と成人後の芙美子の身長から120センチ前後と推定し、高等女学校時代の写真から多感な少女の表情を作り上げました。

須崎町公園内に設置されている文学碑と一体となるように、行商の途中で一休みする芙美子。その視線は多賀公園に向けられています。そこはアンパンを売りさばいた芙美子がよく遊びに行き、「いいことがありますように」と馬の銅像に願いを込めた思い出の地。意志の強さと少女のあどけなさを残した芙美子の像は、今の子どもたちにあふるさとに誇りを持ち、アイデンティティをしっかりと持って、生きてもらいたいとの願いが込められています。



思い出の地を見つめる芙美子は何を想うのか



彫刻家 片山さん(左)と能間会長(右)

林芙美子像は、直方文化連盟創立65周年事業の一環として同連盟が建立し、市に寄贈されたもので、今年6月28日の林芙美子の命日に合わせ、昨年6月から約300人の寄付が寄せられ、実現しました。6月27日の除幕式では除幕式と合わせて第40回林芙美子忌が行われ、献花や芙美子の詩の朗読、直方少年少女合唱団の合唱などで芙美子が偲ばれました。同連盟の能間会長は、「芙美子と直方の縁を大切にし、文学碑と芙美子像一体として直方の文化のシンボルとなるような取り組みを根付かせていきたい」と思いを語りました。

(参考)「ふるさと文化誌 第9号 直方まち物語」 福岡県文化団体連合会  
「林芙美子像 建立へ向けて」 直方文化連盟